

15 「歯科口腔介護・演習」臨地実習の現状報告 —施設入所者の全身および口腔状況から—

○平澤 明美, 江川 広子, 本間 和代, 渡辺 美幸, 上原 愛,
和田麻衣子 (歯科衛生士学科), 野村 章子 (歯科技工士学科)

【目的】本学では「歯科口腔介護・演習」の臨地実習を通して学生の高齢者や介護への理解が深まっているが、現在まで実習状況の調査は行われていない。そこで施設入所者の全身および歯科領域の変化を、施設職員の介護記録と学生のアセスメント記録から調査したので報告した。

【対象および方法】対象は、学生が2001年6月から2004年1月にかけて初回のアセスメント調査を行い、その後歯科口腔介護を6~7か月間継続的に実施した男性11名、女性44名であり、平均年齢は 83.5 ± 7.7 歳であった。調査は歯科口腔介護実施前、3~4か月後と6~7か月後の3回（初回、2および3回目）実施した。調査項目は、アセスメント60項目より寝たきり度・痴呆度ランク、義歯装着状況、うがい動作、食事形態および舌苔の有無の6項目とした。

【結果と考察】寝たきり度ランクはA（14名）B（26名）C（15名）、痴呆度ランクは正常（2名）I（2名）II（8名）III（34名）IV（8名）M（1名）であった。

義歯装着者29名の内訳は上下顎総義歯20名、上下顎部分床義歯3名、混合6名であり、義歯非装着者は26名であった。

うがいのできる者は、初回ではランクAが92.3%と最も多く、ランクB・Cと重度になるに従い減少した。ランクBでは2回目、ランクCでは3回目からうがい動作に改善傾向がみられた。

普通食を摂取していた者は、初回ではランクAが84.6%と最も多く、ランクB・Cが重度になるに従い減少した。2・3回目も同様であった。

舌苔付着が認められた者は、初回ではランクCが66.7%と多く、つぎにランクA・Bと続いた。3回目でランクA・Cに舌苔付着ありが減少した。

以上の結果から、実習期間を通して入所者の初回の状態は概ね変化しなかった。一部、寝たきり度ランクからうがい動作と、舌苔付着状況に改善傾向がみられた。今後は、アセスメント調査の再検討を行い、別の観点から歯科口腔介護の効果を明らかにしたい。

16 歯科口腔介護実習による要介護高齢者の口腔衛生状態の変化

○渡辺美幸, 本間和代, 上原 愛, 江川広子, 平澤明美 (歯科衛生士学科), 野村章子
(歯科技工士学科), 新井俊二 (高齢者歯科保健介護研究所), 佐藤裕子, 金子 潤 (歯科衛生士学科)

【はじめに】

本学では、歯科衛生士学科1年次に歯科口腔介護の基礎教育を受けた学生が、2年次に5ヶ所の介護保険施設においてケアマネジメント手法に基づいた臨地実習を行っている。そこで、本実習の教育的効果を明らかにするため、入所者への口腔管理の関わり方を変える試みを行った。その変化を観察・評価し、学生の歯科口腔介護技術レベルの把握と今後の課題について検討したので報告する。

【対象および方法】

対象は、介護老人保健施設「ケアポートすなやま」に入所している男性7名、女性34名、計41名（平均年齢 84.1 ± 8.7 歳）である。調査は、平成14年10月中の3週にわたり、述べ12日間行った。月曜日から木曜日までの週4日間、1週目は入所者自身が、2週目は施設職員が、最後の3週目は学生中心に口腔清掃を実施して入所者の口腔管理を行った。毎週木曜日の口腔清掃

実施後、現在歯および義歯のプラーク残存率を教員が診査し、現在歯20歯以上の群（以下、I群）、現在歯10歯以下の群（以下、II群）および人工歯群について、PHP法を応用してプラーク残存率を求め、評価した。

【結果および考察】

人工歯群においては、口腔外で比較的容易に清掃できることからプラーク残存率は10%台と低く、3者間に顕著な差はなかった。また、I群のプラーク残存率は、入所者61.2%、施設職員54.0%で著しい差が認められなかったものの、学生では26.2%に低下した。同様にII群のプラーク残存率についても学生で低下がみられた。現在歯のプラーク残存率が施設職員ではあまり低下が認められなかったのに対し、学生においてより顕著に低下が認められたことは、1年次の基礎教育における歯および口腔形態の理解や口腔清掃用具の使用技術などを習得したことが大きな要因ではないかと思われた。